姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第59集

市之郷遺跡第16次発掘調査報告書

2018

姫路市教育委員会

市之郷遺跡第16次発掘調査報告書
姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第59集
二〇一八
姫路市教育委員会

序

姫路市内には、約 1,200 か所を数える遺跡が所在しております。本市ではこれらを貴重な歴史遺産として後世に伝えていくため埋蔵文化財の発掘調査、整理、研究や展示などの公開事業を実施し、その保存と継承に努めております。このたび発掘調査を実施しました日出町三丁目の周辺は、弥生時代から中世にかけての市之郷遺跡をはじめ、市之郷廃寺などの主要遺跡が所在し、播磨地域の歴史を語る上で欠かすことのできない地域です。また、近年では JR 山陽本線の鉄道高架事業、阿保地区区画整理事業、キャスティ 21 などの周辺の再整備事業に伴い発掘調査が実施され、遺跡の実態が明らかとなってきました。今回の調査成果も、地域の歴史解明の一助になることと存じます。

最後に、事業実施にあたり多大なご協力を賜りました株式会社ナガタ薬品、姫路合同貨物株式会社、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成 30 年（2018 年）3 月
姫路市教育委員会
教育長　中杉隆夫

―例言―

1. 本書は、兵庫県姫路市日出町三丁目 19 番 1 で実施した市之郷遺跡（遺跡番号：020462）の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査（調査番号：20160402）は、株式会社ナガタ薬品、姫路合同貨物株式会社からの委託を受け、姫路市が実施した。発掘調査及び報告書の編集は、姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが担当した。
3. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とした。
4. 土層名は、農林水産省農林水産技術会事務局・『新版標準土色帳』（1999 年度版）に準拠した。
5. 本書で使用した遺構番号は、遺構種ごとにつけた。各遺構種は以下のように呼称した。
   ピット→SP　土坑→SK　溝→SD　竪穴建物跡→SI　掘立柱建物跡→SB　不明遺構→SX
6. 本報告に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターに保管している。
7. 調査及び報告書の作成にあたっては、兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授　森永速男氏にご協力をいただくとともに、玉稿を賜った。

－調査・整理の体制－

姫路市教育委員会
教 育 長　中杉隆夫
教育次長　八木　優（平成 28 年度）
　　名村哲哉（平成 29 年度）
生涯学習部
部　　長　植原正則（平成 28 年度）
　　岡田俊勝（平成 29 年度）
文化財課
課　　長　花幡和宏
課長補佐　大谷輝彦

埋蔵文化財センター
館　　長　前田　光則
課長補佐　岡崎　政俊
係　　長　森　恒裕
技術主任　小柴　治子、中川　猛、
福井　優、南　憲和、関　梓
技　　師　黒田　祐介
技 術 員　山下　大輝（平成 29 年度、
平成 29 年 10 月 1 日～技師補）
主　　事　小林　啓佑（平成 28 年度）
　　岡本　武平（平成 29 年度）
嘱託職員　韋　美紗（平成 29 年度）、香山　玲子
（平成 28 年度）、田中　章子、玉越綾子、
野村　知子、三輪　悠代、黒岩　紀子、
清水　聖子、松田　聡子
整理補助員　鈴木 千枝美（平成 29 年度）、宅見 春美、
寺本 祐子、藤村 由紀、長谷川 鈴代
（平成 29 年度）、荒木 聖奈子（平成 28 年度）
臨時職員　秋枝 芳（平成 28 年度）

－目次－

序 例言 調査・整理の体制　目次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査地の位置

1．調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2．調査地の位置と周辺の遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

3．既往調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第Ⅱ章　調査の成果

1．調査区の基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2．弥生時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

3．古墳時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

4．奈良時代～平安時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

5．平安時代末～鎌倉時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第Ⅲ章　総括 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第Ⅳ章　考察　市之郷遺跡で検出された焼土（SK26）の考古地磁気年代・・（森永速男）・・・ 6

－図版目次－

図版 1 ／ 図 1　調査の位置と周辺の遺跡
　　図 2　市之郷遺跡の既往調査区位置図
図版 2 ／ 図 3　調査区平面図
図版 3 ／ 図 4　SK16
図版 4 ／ 図 5　SI1
図版 5 ／ 図 6　SI3 遺物出土状況　図 7　SI2・3
図版 6 ／ 図 8　SI11
図版 7 ／ 図 9　SI11（完掘）
図版 8 ／ 図 10　SI18　図 11　SI9
図版 9 ／ 図 12　SI16　図 13　SI5
図版 10 ／ 図 14　SI8・SI9
図版 11 ／ 図 15　SB1
図版 12 ／ 図 16　SK11　図 17　SK11 遺物出土状況
図版 13 ／ 図 18　出土遺物実測図 1
図版 14 ／ 図 19　出土遺物実測図 2
図版 15 ／ 図 20　出土遺物実測図 3
　　表 1　出土遺物観察表
図版 16 ／ 写真 1　調査区全景　写真 2　調査区北部全景
　　写真 3　1 区　写真 4　2 区
図版 17 ／ 写真 5　3 ～ 7 区　写真 6　8 ～ 13 区
　　写真 7　13 ～ 17 区　写真 8　15 ～ 19 区
　　写真 9　19 ～ 23 区　写真 10　調査区全景
図版 18 ／ 写真 11　SI1　写真 12　SI2, 3
　　写真 13　SI3 遺物出土状況　写真 14　SI5
　　写真 15　SK16　写真 16　SI18
　　写真 17　SI8, 9, 11・SD16　写真 18　SI9
　　写真 19　SI11　写真 20　SI8　写真 21　SI16
　　写真 22　SB1　写真 23　SD16 断面
　　写真 24　SK26　写真 25　SK11
図版 19 ／ 写真 26　出土遺物 1
図版 20 ／ 写真 27　出土遺物 2
図版 21 ／ 写真 28　出土遺物 3

第Ⅰ章　調査に至る経緯と調査地の位置

1.　調査に至る経緯

姫路市日出町三丁目において、店舗建設工事が計画された。当該地は市之郷遺跡（県遺跡番号 020462）の範囲内に所在する（図 1）。また、兵庫県教育委員会がＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に先立ち実施した発掘調査における、E－３～５区の北側に位置し、県営姫路日出住宅の建設に伴う調査箇所に南接する区画である。平成 28 年（2016 年）8 月 23 日、24 日に 5×1m の試掘坪を 8 箇所、工事予定地内に設定し、確認調査（調査番号：20160220）を実施した。その結果、遺構が良好に保存されていることが判明したことから、工事範囲 1,191.7 ㎡を対象とし、本発掘調査を実施することとなった（図 2）。調査期間は、平成 28 年 12 月 20 日から平成 29 年 5 月 10 日で、市之郷遺跡において姫路市が実施した発掘調査としては第 16 次調査にあたる（調査番号：20160402）。

2.　調査地の位置と周辺の遺跡

市之郷遺跡は、弥生時代から中世にかけて営まれた集落遺跡である。包蔵地の範囲は、JR 東姫路駅周辺の姫路市日出町、市之郷、市之郷町、阿保にまたがる東西約 1km、南北約 350m を測り、遺跡の東端は、現在の市川西岸に達する（図 1）。遺跡の中央付近に 7 世紀半ばの創建とされる市之郷廃寺（県遺跡番号：020463）がある。当該地周辺は、姫路駅周辺の山陽本線等連続立体交差事業等によって発生した用地を活用した都市計画「キャスティ 21 計画」のサブエリア（生活利便ゾーン、健康福祉・住宅ゾーン）に該当するほか、姫路駅周辺土地区画整理事業地にも該当しており、兵庫県警姫路警察署やものづくり大学校、すこやかセンターなどの施設、大日線などの道路整備が進められてきた。これらの再開発事業に伴い遺跡の本格的な調査が開始されたことから、当初の遺跡名は「仮称　姫路駅周辺第 3 地点遺跡」であったが、平成 22 年（2010 年）5 月 26 日をもって「市之郷遺跡」に変更された。なお遺跡名にもなっている「市之郷」という地名は、『枕草子』『山家集』等に登場する「飾磨市」に由来するという説が提唱されている。

周辺には南に隣接して阿保遺跡第 1 地点・第 2 地点が所在する。前者からは初期須恵器や韓式系土器がみつかっており、近年には縄文土器も出土した。後者では弥生時代の竪穴建物跡や中世の掘立柱建物跡、木棺墓が確認され、踏脚硯や石帯等の奈良時代から平安時代の官衙に関連するとみられる遺物も出土している。約 1km 西方には播磨国府推定地である本町遺跡やその関連施設跡とされる豆腐町遺跡が所在する。市川東岸には市内最大の前方後円墳である国指定史跡壇場山古墳や豊富な渡来系副葬品が国指定重要文化財となっている宮山古墳をはじめ、古墳時代を通じて多くの古墳が築造されている。

3.　既往調査

市之郷遺跡では、昭和 16 年（1941 年）におこなわれた姫路貨物駅操車場拡張工事によって多くの弥生土器が出土した。その際、遺物の採集がなされており、今里幾次氏によって報告されている（今里 1962）。昭和 45 年（1970 年）には、鎌木義昌氏が山陽新幹線建設に伴う事前調査を実施し、弥生時代中期の竪穴建物跡や奈良時代の掘立柱建物跡が検出された（鎌木 1971）。平成 6 年以降は、前述の再開発事業及び民間開発事業に伴い、姫路市教育委員会及び兵庫県教育委員会による調査が継続的に実施されてきた。姫路市では、平成 29 年度までに E 区、兵庫県では、平成 7 年以降 5 次にわたる本発掘調査がおこなわれている。今回報告する姫路市第 16 次調査と特に関連するのが兵庫県第 1 次調査および、姫路市第 13 次、14 次、18 次調査である（図 2）。前者は、ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う調査で、そのうち最も東端の調査区である E 区が今回の調査地に隣接している。確認されたのは弥生時代から平安時代以降にかけての遺構で、なかでも造付けのかまどを持つ竪穴建物跡から初期須恵器と韓式系土器が出土したことで渡来人集落の存在が明らかとなり注目された。姫路市第 13 次調査、第 14 次、18 次調査は、市道城東 146 号線の拡幅、水路付替及び、建物建設に伴う調査である。これらの調査でも、同じく 5 世紀から 6 世紀の竪穴建物跡を検出し、渡来人集団の集落域の北側への広がりを確認した。

第Ⅱ章　調査の成果

1.　調査区の基本層序

現地表面から盛土、旧耕土、床土を経た約 1m～ 1.5m 下層で、地山である黄灰色砂礫層または黄灰色細砂層を確認した。検出レベルは調査区の南西側が低く、北西側が高くなっており、T.P. 11.9m～ 12.6m 前後である。

検出した遺構は、弥生時代の竪穴建物跡、土坑、溝、方形周溝墓、古墳時代の竪穴建物跡、土坑、溝、掘立柱建物跡、柱穴、中世の土坑、溝、柱穴などである。以下、時代ごとに主要遺構の詳細を述べる。なお、詳細図がある遺構は、図もしくは図版番号を示すが、それ以外の遺構はすべて図 3 に掲載している。

2.　弥生時代

竪穴建物跡 4 棟（SI1, 2, 4, 6）、土坑 8 基（SK1, 2, 4, 8, 12, 13, 16, 27）、溝 3 条（SD6, 8, 11）、方形周溝墓 1 基（SD16）を検出した。

竪穴建物跡

SI1　最大で東西 3.5m、南北 5.1m分を検出したが、既存構造物の撹乱により中央付近のみが残存するため、全体の規模は不明である（図 5)。燃焼施設は直径 1.4m、深さ 0.35mの中央土坑である。床面から出土した壺の底部の形状から　弥生時代中期（IV）の遺構と推測される。

SI2　最大で、東西 1.7m、南北 5.7m分を検出したが、全体の規模は不明である（図 7)。高床部を持ち、燃焼施設は｜○(イチマル）型中央土坑である。南壁付近から弥生時代中期（IV）の広口壺の口縁部が出土した（図 18-2)。SI3 で出土した器台（図 18-3）も本来は SI2 の遺物である可能性がある。

SI4　床面が完全に削平されており、｜○(イチマル）型中央土坑の基底部のみを検出した。SI4-SK1 がイチ土坑、SI1-SK2 がマル土坑である。SI4 内 SK1 は 1.3m×0.8mの不整形な楕円形を呈し、埋土には炭が多く含まれていた。SI1 内 SK2 は、直径 1.1mを測る。土坑の埋土からは、弥生時代中期（IV）の遺物が出土している。

SI6　東西 5.7m、南北 5.3mで北側が調査区外に延びる。外壁に沿って幅 1.2 ～ 1.5mの高床部を備え、一段下がった中央部の隅に主柱穴を設けている。遺物がほとんど出土しておらず、建物の内部構造から弥生時代の遺構であると推察するが、上層埋土からは古墳時代中期の須恵器杯身の細片が出土している。

土坑

SK4　最大で 2.5m×4.0mの範囲で検出した。撹乱により全体の規模は不明であるが、形状が不整形で、深さも一定していないことから、自然堆積層である可能性も考えられる。弥生土器とみられる遺物が出土しているが、詳細な時期は不明である。

SK8　最大で 2.5m×6.5mの範囲で検出した。撹乱により全体の規模は不明であるが、形状が不整形で、深さも一定していないことから、SK4 と同じく自然堆積層である可能性が高い。遺物は、弥生時代中期（II）の甕、壺が出土した。

SK12 最大で東西 4.5m、南北 3.5mの範囲で検出した。撹乱により全体の規模、形状は不明である。SK8 と同じく自然堆積層の可能性がある。遺物は、弥生時代中期（II）の甕、壺が出土した。

SK13 直径 1m、深さ 0.6mを測る。埋土から弥生時代後期の土器の破片が出土した。

SK16 最大で東西 6.0m、南北 6.0m分を検出したが、全体の規模は不明である（図 4)。中央の東西 4.5m、南北 3.5mの隅丸方形を呈する範囲が 1 段下がり、0.2m程度低い。中央部の北東隅で東西 0.9m、南北 1.9mの範囲で炭化物を検出し、その中央付近から 2 基の土坑を検出した。このうち北側の SK16-SK1 は、直径 0.6m、深さ 0.4mを測る。南側の SK16-SK2 は、0.65m×0.35mの楕円形で、深さは 0.1mを測り、埋土全体に炭が混じっていた。出土遺物は、SK16-SK1 から弥生時代中期（II）の甕が出土した（図 18-1)。このほか、炭化物とその周辺よりサヌカイトチップが出土した。SK16 は、外周に沿って部分的に周溝状のプランを検出するなど、竪穴建物の可能性も考えられるが、主柱穴が確認できず、類例調査も含め今後の検討を要する。

SK27 後述する SD16 の内側東部で検出した。コの字状に検出した SD16 の北辺の上面から内側東部のほぼ全域約 7m の範囲に、炭、焼土、弥生時代後期（V）を含む土層が 5 ～ 20cm 堆積していた。SD16 に伴うものとも推測できるが、溝の上面にも堆積していることから、墓の盛土が削平され 2 次的に堆積したもの、あるいは別遺構の可能性も考えられる。

溝

SD6　幅 1.3m、延長 6.5m、深さ 0.25mを測る。遺物は、弥生時代中期（IV）の壺底部などが出土した。

SD8　幅 0.3m、延長 3.3m、深さ 0.1mを測る。弥生時代後期（V）の高杯脚部などが出土した。

SD11 幅 1.3m、延長 3.5m、深さ 0.4mを測る。弥生時代後期（V）の遺物が出土した。

方形周溝墓

SD16 墓壙は検出できなかったが、溝の形状から方形周溝墓として報告する。東西 9.5m、南北 7.5mの範囲で、幅 0.6 ～ 0.9mのコの字状に屈曲する溝を検出した。深さは 0.3 ～ 0.5mを測る。溝は南東隅で一旦途切れていた。遺物は、溝の上層埋土から弥生時代後期（V）末頃の壺の破片が出土しているが（図 19-37)、前述した SK27 が別の遺構であれば、時期が遡る可能性もある。SK27 との関連性については、今後の検討を要する。

3.　古墳時代

竪穴建物跡 14 棟（SI3, 5, 7 ～ 18)、土坑 9 基（SK3, 10, 15, 17, 20, 23 ～ 26)、溝 2 条（SD17, 18)、掘立柱建物跡 1 棟（SB1)、柱穴 62 基を検出した。

竪穴建物跡

SI3　1 辺約 6.5mの方形を呈し、深さ 0.75mを測る（図 6, 7)。遺構検出面から 0.2mの深さで、古墳時代前期の土師器が大量に出土した（図 18-4 ～ 9)。

SI5　東西 2m以上、南北 4.8m、深さ 0.3mを測る（図 13)。遺構検出面から 0.2m下で奈良時代の土師器甕、平瓦がまとまって出土したが（図 19-32, 33)、建物の床面とみられる底部からは遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。北東隅に柱穴、底面北端から焼土を検出した。

SI7　東西 1m、南北 0.6mの範囲を検出した。埋土に多量の炭化材と焼土を含んでおり、炭化材は特に底部付近で集中して出土したことから、焼失住居とみられる。遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

SI8　建物の北側約 1/2 を検出した。東西 6.0m、南北 3.5m以上で、深さ 0.4mを測る（図 14）。床面直上より多量の炭化材が出土したことから、焼失したものとみられる。南西隅で造付けのかまどを検出した。燃焼部の平面形は雫形で、最大幅 0.72m、長さ 1.18mを測る。中央に支柱とみられる川原石を据えていた。主柱穴は北辺の 2 基を確認した。このほか、建物外縁に沿って幅 0.4 ～ 0.8m、深さ約 0.2mを測る周溝を検出した。西辺の周溝はかまどの下にも続いており、一旦溝を掘り下げてからかまどを構築したことが判明した。また、かまどの外壁以外の埋土も建物全体のそれとは異質であったことから、西壁の周溝上部は、テラス状に床面より 1 段高くなっていた可能性が想定できる。同様の構造を持つ竪穴建物跡が、第 13 次調査でも 1 棟確認されている。出土遺物は、須恵器有蓋高杯、壺、土師器小型丸底壺、甕、高杯、（図 19-25 ～ 29）、金属片などがあり、時期は、陶色田辺編年 TK208 型式に併行する 5 世紀中頃の年代が推察される。

SI9　SI8に削平され、建物東辺の造付けかまど周辺の 2.8m×1.9m、深さ 0.4mの範囲を検出した（図 11）。かまどは、北端を SP233 に削平されているが、平面形は幅約 0.9m、長さ 0.8mの不整形な楕円を呈する。中央に支柱とみられる川原石を 2 個据えていた。かまどから韓式系軟質土器平底鉢、土師質算盤形紡錘車が出土したほか、周囲の床面から須恵器甕の細片も出土した。時期は、兵庫県教育委員会が平成 8 年に実施した兵庫県第 1 次調査 E-5 区で検出した SH18 と同様、陶色 TG232 号窯跡に併行する 5 世紀前葉の年代が当てられる。

SI10　一辺 2.5m以上の規模である。南西隅で造付けかまどの北側約 1/2 を検出した。出土した須恵器片から古墳時代後期（6 世紀）の遺構とみられるが、削平が激しく詳細は不明である。

SI11　建物の西部を検出した。建替えが行われたとみられ、約 1.5mの間隔で造付けのかまどを 2 基確認した（図 8, 9）。上層のかまどは、幅 1.0m、長さ 0.7m以上の規模で、床面から約 0.15m掘り下げられており、埋土には大量の炭や焼土が混じっていた。また、支柱として据えていたとみられる川原石が出土した。下層のかまどは、完全に壊され、焼土、炭、白色粘土塊の混じった埋土より、韓式系軟質土器平底鉢、長胴甕、土師質当具（図 18-18 ～ 20）、土師器甕（図版 20-SI11）、須恵器甕（図版 19-SI11）が出土した。土師器甕の下部からは、支柱据付痕跡とみられる直径 0.5mのピットを検出している。遺構の時期は、SI9 と同じく陶色 TG232 号窯跡に併行する 5 世紀前葉の年代が想定できるが、建物の主軸がややずれることから、若干の時期差がある可能性も考えられる。

SI12　SI5 による削平及び後世の撹乱により、かまど周辺のみを検出した（図 13）。出土した須恵器片から古墳時代後期（6 世紀）の遺構とみられるが、細片のため詳細は不明である。

SI13　削平が激しく、床面が遺構検出面とほぼ同レベルであることから、詳細は不明である。周溝の可能性がある SD13 との位置関係から約 7.5m四方の規模で、SK20 が造付けのかまどである可能性が想定できる。

SI14　平面形は方形で、3.5m×4.0m以上の規模である。外縁に沿って幅 0.6 ～ 0.8mの周溝を確認した。出土した須恵器杯身から陶色田辺編年 TK209 ～ 217 形式に併行する 7 世紀の遺構とみられるが、出土遺物が少なく詳細は検討を要する。

SI15　平面形は方形で、一辺 2.5m以上の規模である。出土した須恵器杯身から陶色田辺編年 MT15 ～ TK10 型式に併行する 6 世紀前半～中頃の時期が当てられる。

SI16　建物西辺の幅 1.1mの範囲を検出した。一辺の長さは、5.2mである。北西隅に造付けのかまどを確認した（図 12）。燃焼部の規模は、幅約 0.8mの範囲を検出し、1.3m程度に復元できる。長さは、1.5mを測る。かまどの埋土からは、土師器甕（図 19-23）が出土した。このほかの出土遺物として、かまど周辺から土師器甕、建物南部から須恵器無蓋高杯が出土している。高杯は脚部の接合痕跡から四方透かしが施されていたとみられる。時期が陶色田辺編年 TK216 ～ 0V46 号型式に併行する 5 世紀前半～中頃の年代が推察される。

SI17　撹乱による削平が激しく、規模などの詳細は不明である。出土した須恵器杯身から陶色田辺編年 MT85 型式に併行する 6 世紀後半の時期が当てられる。

SI18　撹乱による削平が激しく、建物北東隅の造付けかまど周辺の 2.3m×1.5m、深さ 0.18mの範囲のみを検出した（図 10）。かまどは、約 1/3 を SP32、285 に削平されていたが、燃焼部は、幅約 0.75m、長さ 1.5m以上の不整形な長楕円を呈する。遺物は、かまどより韓式系軟質土器平底鉢、土師器高杯が出土した（図 18-10 ～ 14）。土師器高杯のうち、10、11 は、杯部が椀形で、いずれも脚部が全く出土せず、杯部は正位置に据えたとみられる状態で出土したことから、人為的に脚部を欠いてかまどに置かれた可能性がある。一方、14 は土師質であるものの、側辺と底部の境に明確な稜があり、底部に回転ヘラ切りの痕跡が残る。このことからロクロで製作されたものとみられ、未製品の状態で焼成された可能性が考えられる。遺構の時期は、SI9 と同様の陶色 TG232 号窯跡に併行する 5 世紀前葉の年代が当てられる。

土坑

SK3　東西 3.5m、南北 1.3mの範囲を検出した。撹乱による削平が激しく、底から 0.1 ～ 0.15m分の埋土が残るのみであったが、調査区断面の観察では、本来 0.5m程度の深さがあったとみられる。出土した須恵器長頸壺から、古墳時代後期（6 世紀～ 7 世紀）の時期が当てられ、竪穴建物跡の可能性も想定できる（図版 19-44）。

SK10　3.3m×2.5mの範囲を検出した。古墳時代後期とみられる須恵器が出土したが、細片のため詳細は不明である。

SK15　幅 3.5m、延長 1.8mの範囲を検出した。不整形で屈曲する溝状の遺構であるが、隣接する調査区には続かない。陶色田辺編年 TK217 型式併行とみられる 7 世紀の須恵器杯身が出土した。

SK17 調査区北端に一部を検出したのみで、遺構の詳細は不明である。陶邑田辺編年 TK10 型式併行とみられる 6 世紀の須恵器杯身が出土した。

SK20 撹乱による削平を受け、遺構の南辺のみを検出した。1.0m×0.4m の範囲を検出し、埋土は多量の炭と焼土が含まれていた。前述したとおり、SI13 のかまどである可能性も想定できるが、出土遺物がほとんどなく、時期等の詳細は不明である。

SK23 0.6×1.0m の楕円形を呈する。古墳時代後期とみられる須恵器が出土したが、細片のため詳細は不明である。

SK24 1.1×1.6m の不整形な楕円形を呈する。古墳時代後期とみられる須恵器が出土したが、細片のため詳細は不明である。

SK25 直径 0.5m の円形を呈する。SK24 に切られる。古墳時代中期から後期の須恵器片が出土したが、細片のため詳細は不明である。

SK26 東西 1.1m、南北 0.8m の長方形を呈する。上面はほぼ削平され、遺構検出面から最大で 0.05m の深さが残存していた。埋土はほとんどが炭と焼土で、わずかに残る側壁面が強く被熱し、最大で 2cm 程度の厚みで基盤層が焼土化し、その周辺も 2cm 前後の範囲が赤く変色していた（図版 18- 写真 24）。時期を示す出土遺物が皆無であり、遺構の詳細な性格も不明であったことから、兵庫県立大学教授森永速男氏に依頼し、古地磁気の分析を行ったところ、後述する第Ⅳ章のとおり、550 ～ 600 年との結果が示された。今後の詳細な検討を要するものの、遺構の形状、壁面が強く被熱し埋土がほぼ炭であること、砥石の破片とみられる石片が出土していることから、古墳時代中期の鍛冶関連遺構の可能性を想定しておきたい。

溝

SD17 幅 0.9 ～ 1.1m、延長 12.5m の範囲を確認した。深さは最大で 0.15m を測る。SI14、SI15 の上面で検出した。出土遺物から、古墳時代後期（6 世紀）の時期が当てられるが遺物が細片であることから詳細は不明である。

SD18 SD17 の北側に 1.5 ～ 2m の間隔をおいてほぼ平行する位置で検出した。深さは 0.05 ～ 0.1m 程度で、SI14 の上面付近は、砂を多く含んでいた。陶邑田辺編年 TK209 型式併行とみられる 6 世紀末～ 7 世紀前半頃の須恵器杯身が出土したが、SI14 を削平する遺構であることから、さらに時期が下る可能性が高い。

掘立柱建物跡・柱穴

SB1 SP165, 166, 227, 228, 229, 230, 231, 232, 233, 271 で構成される。東西 8.0m 以上、南北 4.5m を測る。柱間は、5 間×3 間分を確認した。主軸は N-65°-E である（図 15）。柱穴は、0.45m～ 0.6m の不整形な楕円形や隅丸方形を呈する。

柱穴 古墳時代の遺構とみられる柱穴は、SB1 を構成するものを除くと 62 基を数える。いずれも柱穴の掘方が一辺 0.3 ～ 0.7m を測り、楕円形または隅丸方形を志向している。これらのうち、SP15 ～ 17、SP285, 40, 51、SP42, 32, 30, 41, 54、SP150, 147, 163、SP75, 76, 188、SP77, 79, 224, 225, 207、SP266, 258, 259, 261 はそれぞれ建物跡に復元できる可能性がある。

4. 奈良時代～平安時代

SI5 の上層埋土より平瓦（図 19-33）及び土師器甕（図 19-32）が出土したものの、この時期の明確な遺構は確認できなかった。（図 13）

5. 平安時代末～鎌倉時代

土坑 9 基（SK5, 6, 7, 9, 11, 14, 19, 21, 22）、および柱穴 213 基を確認した。ピットは調査範囲が狭小であるため、掘立柱建物跡に復元することは困難であり、今後詳細な検討を要する。

土坑

SK5 3.0m×1.1m の範囲で検出した。周囲がほぼ撹乱を受け、東は調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。糸切り高台の須恵器椀などが出土した。

SK6 SK7 を切る不整形な溝状の遺構であるが、全体に浅く、遺物も細片が混じるのみであることから、自然堆積層である可能性も考えられる。

SK7 8.0m×1.8m の範囲を検出した。東と西は調査区外に続き、南側は撹乱で削平されているため、全体の規模は不明である。平安時代～鎌倉時代の須恵器や土師器に混じって、古墳時代後期の須恵器杯身（図版 19-41）が出土しており、北側から流れてきた遺物や土砂が 2 次的に堆積した包含層である可能性もある。

SK9 6.0m×1.8m の範囲を検出した。東は調査区外に続き、北側は撹乱で削平されているため、全体の規模は不明である。平安時代～鎌倉時代の須恵器や土師器が出土した。

SK11 東西 7.3m、南北 2.5m 以上、深さ 0.43m を測る不整形な楕円形の土坑である（図 16, 17）。大量の川原石に混じって、瓦器椀、土師器羽釜や土師器皿などが出土した（図版 20-52 ～ 57）。川原石は被熱して脆くなったものや、ススが付着したものも散見された。遺構の時期は、平安時代末～鎌倉時代（12 世紀～ 13 世紀）の年代が推察される。

SK14 幅は 1.9m を測るが、南側を SK11 に削平され、北側も調査区外に続くため、全体の規模は不明である。糸切り高台の須恵器椀が出土している。

SK19 1.5m×1.0mの範囲を検出した。深さは、1.1mを測る。大部分が調査区外であることから詳細な形状は不明であるが、円形を志向するプランである。拳大から人頭大の川原石を充填したような埋土の状況であることから、川原石積みの井戸の掘方である可能性が想定できる。遺物は、土師器脚付塊、須恵器甕、碗、墨書のある須恵器片、青磁碗の破片などが出土しており、遺構の時期は、平安時代末～鎌倉時代（12 世紀～ 13 世紀）の年代が当てられる。

第Ⅲ章　総括

今回の調査では、調査区南西側において旧河道と見られる地形の落ちを確認し、古代以前の居住域について、部分的ながら範囲を明確にすることができた。また、弥生時代から古墳時代の竪穴建物跡を検出し、調査地の南北で実施された、既往調査成果における集落の広がりを確認することができた。特に古墳時代中期から後期にかけての比較的継続した竪穴建物跡の分布を看取でき、市之郷遺跡における集落域の推移と渡来系文化の受容と浸透過程を考える上での資料が増加した。

ただ、古墳時代中期の竪穴建物跡については、『市之郷遺跡Ⅰ』（参考文献（11））の記述を元に並行関係を検討して遺構の時期を推測したが、近年進んできた土器のセット関係から検討された編年観から、各項目に記述した陶邑田辺編年の型式より時期が１～２段階下る可能性がある。このことから、竪穴建物跡の時期については、今後のさらなる検討が必要である。

〈引用・参考文献〉※編著者名を付す資料については、50 音順に掲載する。

(1)　今里幾次「播磨市之郷弥生式遺蹟の研究」『古代文化』14-9　1962　日本古代文化学会
　（今里幾次 1980『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会に再録）
(2)　鎌木義昌「市之郷遺跡発掘調査概報」『姫路市埋蔵文化財調査報告書』1971　姫路市埋蔵文化財調査団
(3)　鎌谷木三次「市之郷廃寺」『播磨上代寺院阯の研究』1942　成武堂
(4)　古代の土器研究会編『都城の土器１　都城の土器集成』1992　古代の土器研究会
(5)　笹栗拓「津堂遺跡における古墳時代中期の土器編年－古市古墳群周辺集落の土器様相とその特質－」
　『大阪文化財研究第 50 号』 2017 （公財）大阪府文化財センター
(6)　多賀茂治「玉津田中遺跡の竪穴住居について」『玉津田中遺跡第６分冊』1996　兵庫県教育委員会
(7)　田辺昭三他『陶邑古窯址群Ⅰ』 1966　平安学園考古学クラブ
(8)　長友朋子・田中元浩「西播磨地域の土器編年」『弥生土器集成と編年―播磨編―』
　（大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第５号）2007　大手前大学史学研究所
(9)「渡来人の受容と生産組織」『日本考古学協会 2003 年滋賀大会資料』
　2003 日本考古学協会 2003 年滋賀大会実行委員会
(10)『韓式系土器研究Ⅰ』 1987　韓式系土器研究会
(11)『市之郷遺跡Ⅰ』（兵庫県文化財調査報告第 286 冊）2005　兵庫県教育委員会
(12)『市之郷遺跡Ⅱ』（兵庫県文化財調査報告第 372 冊）2010　兵庫県教育委員会
(13)『市之郷遺跡Ⅲ』（兵庫県文化財調査報告第 406 冊）2011　兵庫県教育委員会
(14)『市之郷遺跡Ⅳ』（兵庫県文化財調査報告第 433 冊）2012　兵庫県教育委員会
(15)『市之郷遺跡Ⅴ』（兵庫県文化財調査報告第 454 冊）2014　兵庫県教育委員会
(16)『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』（（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第 75 輯）1993　大阪府教育委員会
　（財）大阪府埋蔵文化財協会
(17)『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』（（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第 90 輯）1995　大阪府教育委員会
　（財）大阪府埋蔵文化財協会
(18)『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』（（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 10 集）1996　大阪府教育委員会
　（財）大阪府文化財調査研究センター
(19)『野々井西遺跡・ON231 号窯跡』（（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第 86 輯）1994　大阪府教育委員会
　（財）大阪府埋蔵文化財協会
(20)『部屋北遺跡Ⅰ』（大阪府埋蔵文化財調査報告 2009-3）2010　大阪府教育委員会
(21)「(仮称) 姫路駅周辺第３地点遺跡（第２次調査）」『TSUBOHORI　平成９年度（1997）』（姫路市埋蔵文化財調査略報）
　1999　姫路市教育委員会
(22)「(仮称) 姫路駅周辺第３地点遺跡（すこやかセンター建設に伴う）」『TSUBOHORI　平成 13 年度（2001）』
　（姫路市埋蔵文化財調査略報）2003　姫路市教育委員会
(23)「(仮称) 姫路駅周辺第３地点遺跡　キャスティ 21 住宅建設予定地」『TSUBOHORI　平成 12 年度（2000）』
　（姫路市埋蔵文化財調査略報）2002　姫路市教育委員会
(24)『姫路市史』第２巻　1970　姫路市役所
(25)『姫路市史』第７巻下（資料編考古）2010　姫路市

※　土器の器種分類および時期区分については、弥生時代～古墳時代初頭は (8)、古墳時代中期は (5)、(7)、(10)、(16) ～ (20)、古墳時代後期～奈良時代は (4) に準拠した

※　竪穴建物跡の |○(イチマル) 型中央土坑の名称及び定義は (6) に準拠した

第Ⅳ章　考察

市之郷遺跡で検出された焼土（SK26）の考古地磁気年代

兵庫県立大学大学院
減災復興政策研究科
森永　速男

1. はじめに

土壌中に含まれる磁性鉱物（酸化鉄や水酸化鉄）は堆積時の地球磁場情報（強度と方向）を記録する。この磁化（磁場の化石）を堆積残留磁化と呼ぶが、磁気的には不安定な場合が多く、磁場記録としての信頼性は低い。堆積後に、土壌が何らかの過程（例えば、古代人の焚き火など）で熱を受けると、土壌中の磁性鉱物は化学的に変化したり（主に水酸化物から酸化物に）、加えて熱的な残留磁化を獲得する。そういった過程を経て、土壌は堆積時よりもかなり大きい強度でより安定な残留磁化（熱残留磁化）を示すようになる。その残留磁化の方向は、堆積時よりもさらに正確に、被熱時の地球磁場方向と平行になることが知られている。

土壌が被熱を経て地球磁場の正確な記録を持つようになることを利用して、過去の地球磁場方向や強度の変化を復元する研究（考古地磁気学）が行われてきた。その成果として、過去2,000年間の地球磁場方向変化のほぼ連続した考古地磁気標準曲線が作成されている（Hirooka、1971、1983；Maenaka、1990）。この曲線と年代未詳の焼土の残留磁化方向を比較し、一致する箇所をさがすことによって、焼土の年代を決定できる。この方法を考古地磁気年代決定法と呼ぶ。この方法を利用するときの注意点は、標準曲線の年代軸が考古学側から与えられたもの（土器編年など）であるということ、さらに被熱した焼土が記録した地球磁場記録の時間経過に伴う劣化を考慮しなければならない点、である。よって、土器編年などの修正が行われることがあれば、考古地磁気年代も修正されなければならない。そして、記録された地球磁場情報の劣化を改善する、すなわち劣化の原因となっている、焼土が二次的に獲得した磁化を除去しなければならない。さらに、窯跡などの年代では、使用の最終年代が得られるのであって、操業開始、もしくは最盛期の年代が求まるのではないことを知っておく必要がある。

2. 試料採取と磁化測定

市之郷遺跡で確認された焼土範囲；SK26から15個の焼土試料を、磁気コンパスを用いて定方位で、約7cm3のポリカーボネイト製の立方体容器を用いて採取した。残留磁化測定にはスピナー磁力計を、二次的な磁化（被熱時の磁場記録の劣化をもたらすノイズ）の除去には交流消磁法を用いた。一般に被熱後に焼土が獲得する二次的な磁化は3mTもしくは6mTの交流磁場消磁で取り除けることが知られているので、6mTの磁場で消磁した後の残留磁化を用いて考古地磁気年代を決定することとした。

3. 磁化測定結果・考察と考古地磁気年代

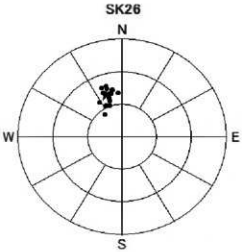
交流消磁後の各試料の残留磁化強度・方向（偏角と伏角）およびそれらの平均値を表1にまとめた。また、消磁後の残留磁化方向と平均方向を図1に示した。

焼土；SK26の交流消磁後の平均残留磁化方向は、平均の偏角 = -18.4°、伏角 = 50.6°、k = 96.5、α95 = 3.9°（kは信頼度パラメータで大きいほど、α95はFisherの95%信頼円で小さいほど、方向データの揃いが良いことを示している）であった。焼土試料それぞれの残留磁化方向はそれぞれ良く揃っており、被熱時の地球磁場の記録としてかなり信頼できる。これらの消磁後の平均方向と、過去2,000年間の標準的な考古地磁気曲線（Hirooka、1971）との比較を図2に示す。

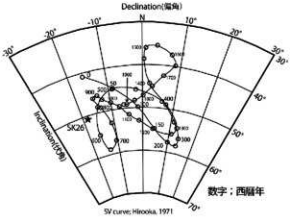
この対比で明らかなように、それぞれの焼土範囲の平均方向と標準曲線との対応を捜すと、考古地磁気年代は西暦550年～600年と推定できる。

試料	交流消磁レベル	残留磁化強度 (mAmm)	偏角 (°)	伏角 (°)
SK26				
1	6mT	0.6905900	−16.9	43.8
2	6mT	0.5167621	−31.7	52.6
3	6mT	0.4750654	−26.3	58.0
4	6mT	0.3468860	−36.6	64.4
5	6mT	0.6387252	−13.2	49.0
6	6mT	0.6368723	−22.3	46.5
7	6mT	0.4769301	−20.0	59.5
8	6mT	0.5733260	−17.7	53.0
9	6mT	0.5477854	−17.7	54.9
10	6mT	0.6760346	−11.9	46.3
11	6mT	0.7184375	−17.0	41.3
12	6mT	0.6932430	−21.8	41.7
13	6mT	0.6315826	−15.7	49.0
14	6mT	0.6841230	−11.1	45.8
15	6mT	0.6444260	−4.9	49.7
平均		0.5967193	−18.4	50.6
			k = 96.5	α95 = 3.9°

挿表 1　焼土範囲（SK26）で採取した土壌試料の残留磁化（強度・方向）とその平均値



挿図 1　焼土（SK26）で採取した土壌試料の、
交流消磁後の残留磁化方向（●）及び平均方向（★）



挿図 2　焼土範囲（SK26）の平均方向と
考古地磁気の標準曲線との対比

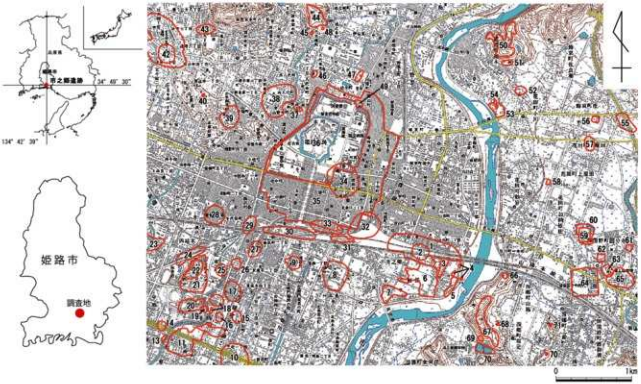
引用文献

Hirooka, K., 1971. Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in south-west Japan, Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., 38, 167-207.

Hirooka, K., 1983. Results from Japan, in Geomahnetism of Baked Clays and Recent Sediments, eds. Creer, K. M. et al., 150-157, Elsevier, Amsterdam.

Maenaka, K., 1990. Archeomagnetic secular variation in Southwest Japan, Rock Mag. Paleogeophys., 17, 21-25.

図版 1



1 市之郷遺跡
2 市之郷廃寺
3 阿保構跡
4 市之郷長堤遺跡
5 阿保下長・永河原遺跡
6 阿保遺跡第2地点
7 阿保遺跡第1地点
8 北条遺跡
9 豊沢遺跡
10 三宅遺跡
11 畑田遺跡
12 竹の前遺跡
13 蒲田遺跡
14 長越遺跡
15 古屋敷遺跡
16 浜田遺跡
17 黒表遺跡
18 小山遺跡
19 生矢神社裏遺跡
20 手柄山南丘遺跡・群集墳1～4号墳
21 手柄山北丘群集墳1～12号墳
22 手柄山北丘遺跡
23 八反長遺跡
24 山崎遺跡
25 橋詰遺跡
26 村游遺跡
27 岩田遺跡
28 千代田遺跡
29 南駅町遺跡
30 亞麻町遺跡
31 朝日町遺跡
32 神屋町遺跡
33 駅前町遺跡
34 本町遺跡
35 姫路城城下町跡
36 特別史跡 姫路城跡
37 東山横溝遺跡
38 八代深田遺跡
39 岩端町遺跡
40 名古山遺跡
41 辻井遺跡
42 辻井廃寺
43 山崎山1～7号墳
44 八代山古墳群1～6号墳
45 大歳神社前遺跡
46 御茶屋町遺跡
47 富士才遺跡
48 東光寺山古墳
49 野里門下層遺跡
50 石積山城跡
51 石積山1・2号墳
52 小川廃寺
53 長谷遺跡
54 高木遺跡
55 上原田遺跡
56 宮ノ浦遺跡
57 上原田廃寺
58 小姫方遺跡
59 播磨国分尼寺跡
60 播磨国分尼寺周辺遺跡
61 国分寺構跡
62 山之越古墳（第3古墳）
63 塩場山古墳
64 播磨国分寺跡
65 国分寺台地遺跡
66 八重餅山構跡
67 坂元山1～9号墳
68 宮山古墳
69 坂元山南麓遺跡
70 坂元山遺跡
71 上鈴山古墳
72 中鈴山古墳

図1　調査の位置と周辺の遺跡（S=1:50,000）

図2　市之郷遺跡の既往調査区位置図（S=1:5,000）

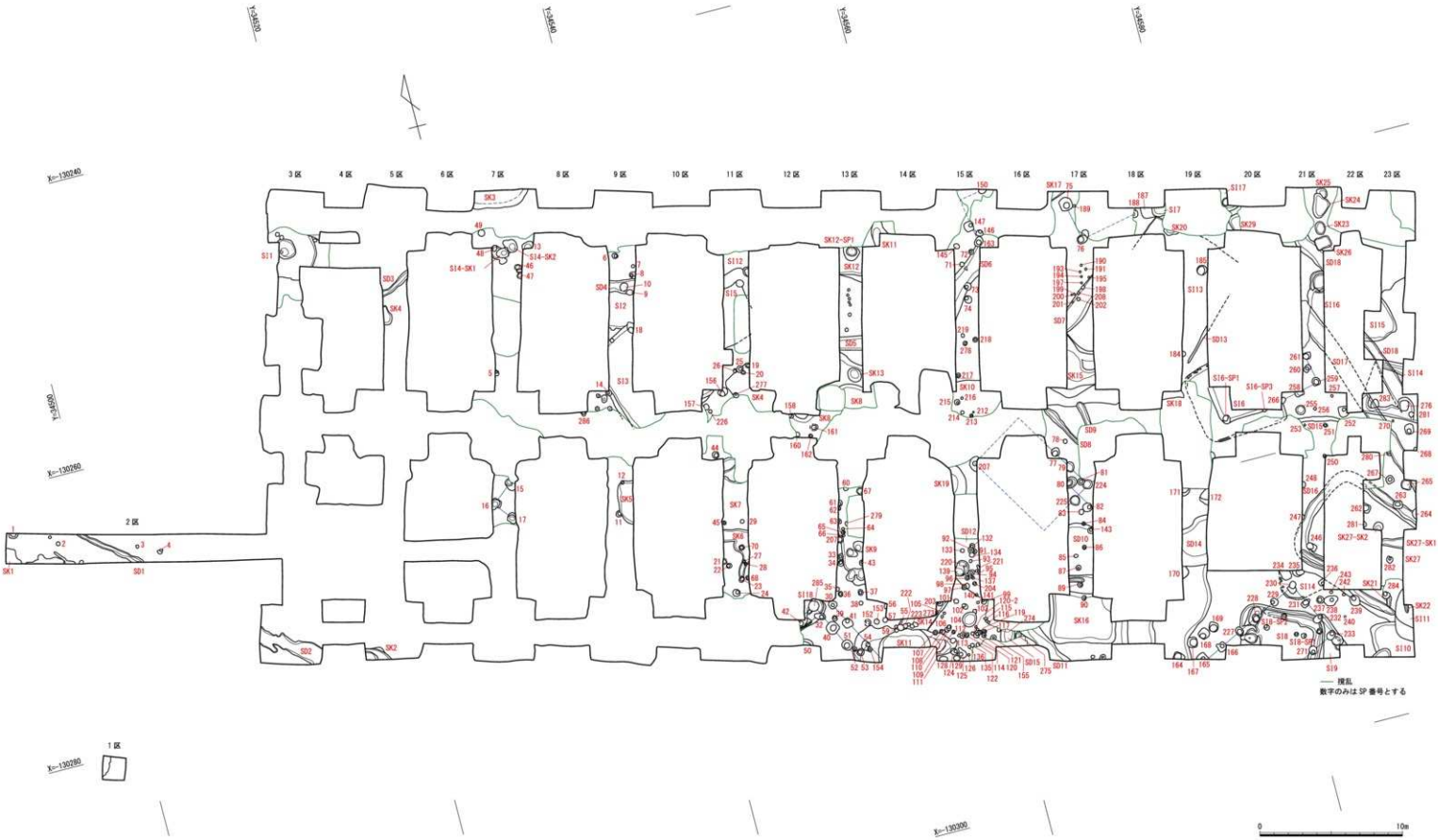
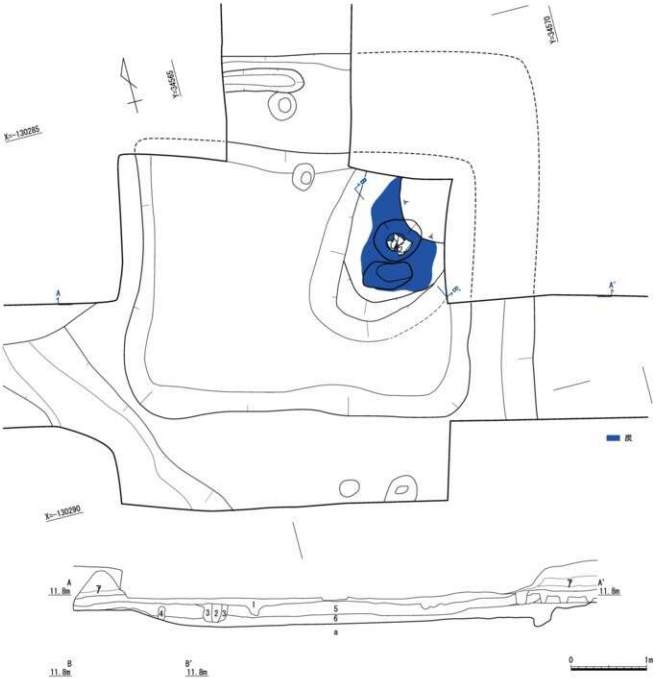


図3　調査区平面図（S=1:250）

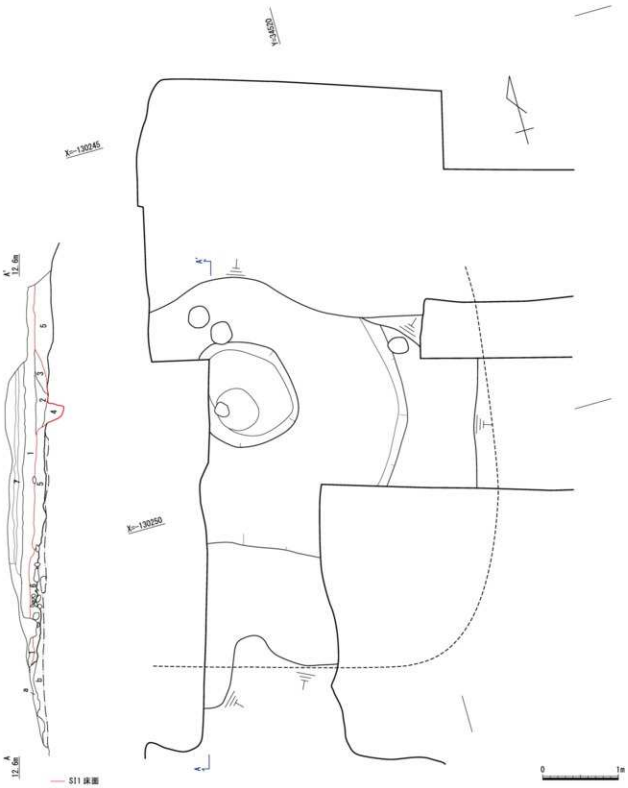


7. 盛土、硬度、床土
1. 包含層 10YR3/2～4/2 砂混じり細砂～中砂
2. 5 層ブロック +1 層ブロック
3. ≒1 層
4. 10YR3/2～4/2 砂混じり細砂～中砂
5. SK16 2.5Y5/3～4/3 シルト
6. SK16 10YR6/4 砂混じりシルト
7. SK16-SK1 2.5Y4/2～5/2 細砂
a. 基盤層 10YR6/4～6/6 砂混じりシルト～細砂

SK16-SK1 遺物出土状況（北から）

図4 SK16（S=1:50）

図版 4



7. 盛土、硬度、床土
1. SI1 10YR3/1 ～ 3/2 砂、粗砂多量混じり細砂
2. SI1-SK1 10YR3/1 ～ 3/2 砂、粗砂多量混じり細砂
a 層ブロック含む
3. SI1-SK1 ¹⁄₄a 層 炭片微量含む
4. SI1-SK1 2.5Y3/2 細砂混じり砂礫 炭、焼土含む
5. SI1 貼床 2.5Y4/2 ～ 3/2 砂、粗砂混じり細砂
6. SI1 貼床 2.5Y4/2 砂、粗砂混じり細砂
a. 基盤層 10YR6/4 ～ 6/6 砂混じりシルト～細砂
b. 基盤層 10YR6/4 ～ 6/4 砂礫

図5 SI1 (S=1:50)

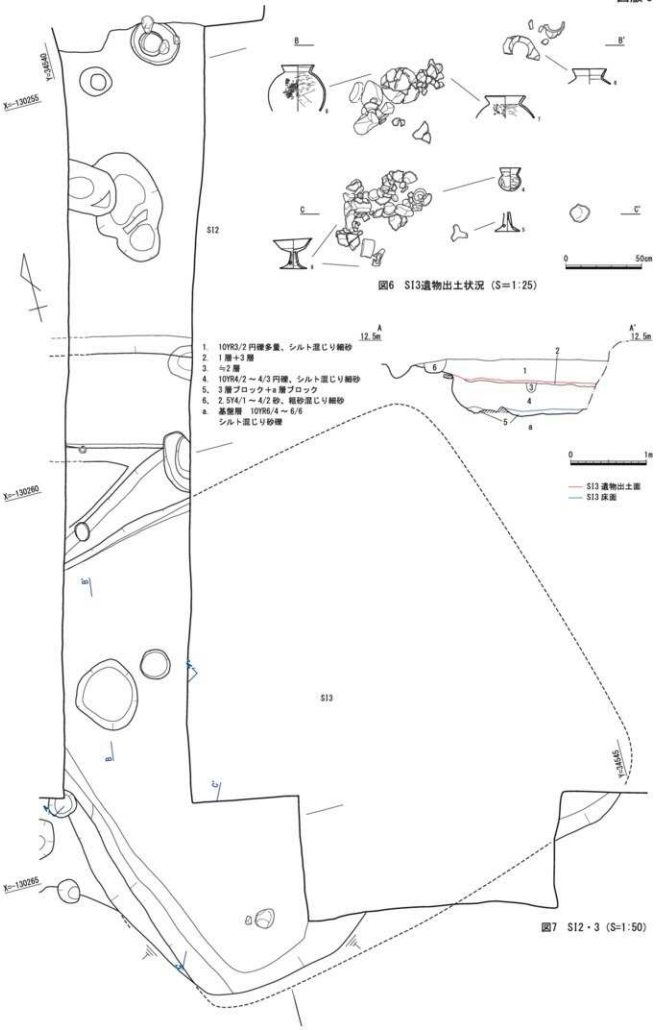


図6 S13遺物出土状況（S＝1:25）

図7 S12・3（S=1:50）

7. 焼土、硬度、床土
1. 2.5YR/3～4/1 ルト混じり細砂
2. 10YR4/2 砂、シルト混じり細砂
炭、焼土多量に含む
3. 2.5Y5/2～5/1 シルト混じり砂質土
炭、焼土多量に含む
4. 10YR4/2～3/2 砂多量混じり細砂
炭、焼土、粘土塊多量に含む
5. 2.5Y5/2～5/1 シルト混じり砂質土
6. SI11-2 貼床 2.5Y5/3～6/3 細砂 ≒a 層
7. ≒4 層
8. 2.5Y7/1 粘土 炭多量含む
9. ≒1 層 2.5Y5/2～4/1 ルト混じり細砂
10. 2.5Y5/3～4/1 砂、シルト混じり細砂
炭、焼土含む
11. 2.5Y4/1～3/1 砂、シルト混じり細砂
炭、焼土含む
12. 10YR5/4～5/6 砂混じりシルト
13. 10YR5/4～5/6 砂混じりシルト
被熱して固く締まる
14. 10YR6/4～6/6 砂混じり粘質土
15. SI11-2 貼床 ≒6 層
a. 基盤層 10YR6/4～6/6 砂混じりシルト～細砂

X=-130293

遺物出土状況（東から）

焼土
炭
SI11 上層床面
SI11 下層床面

0 50cm

図8 SI11 (S=1:25)

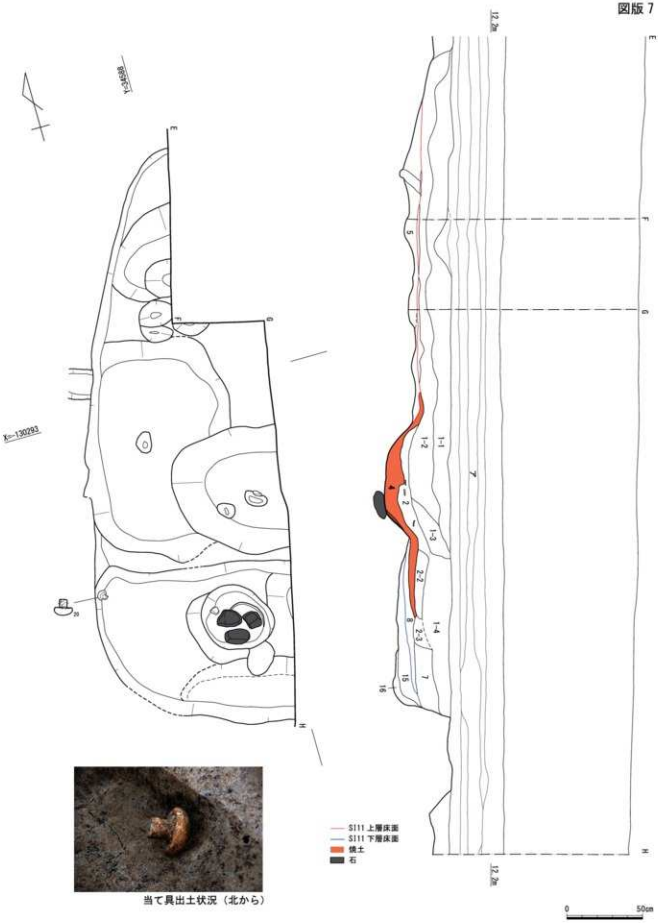


図9　S111(完掘)（S=1:25）

図版 8

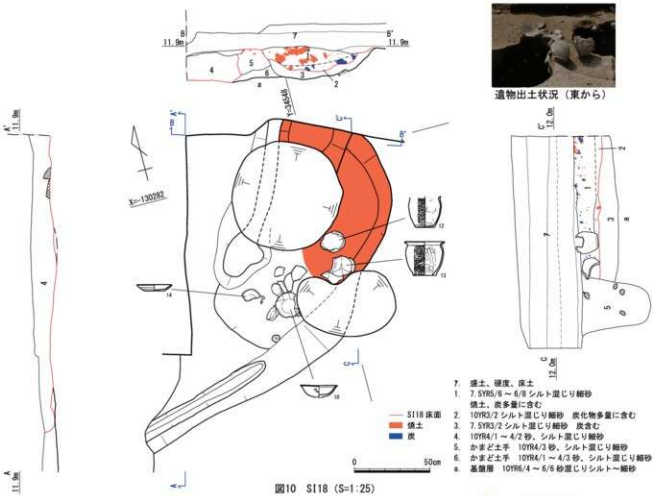


図10 SI18（S=1:25）

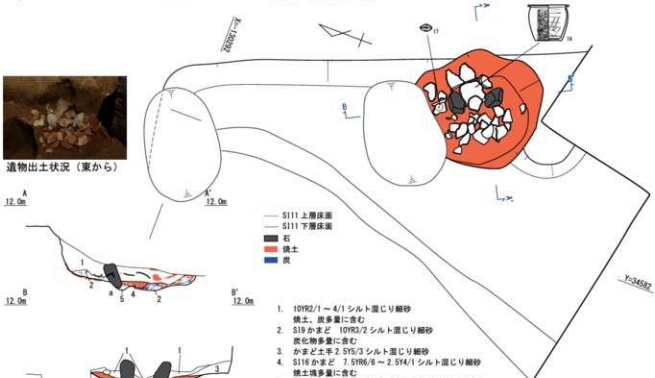


図11 SI9（S=1:25）

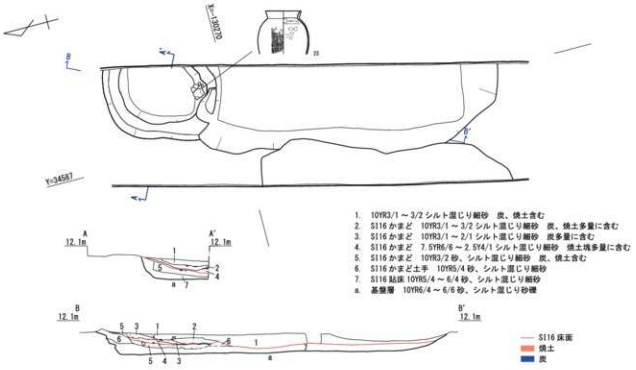


図12　SI16 (S=1:50)

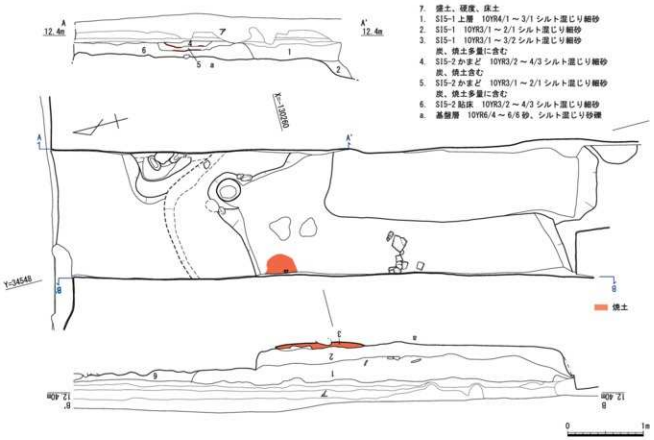
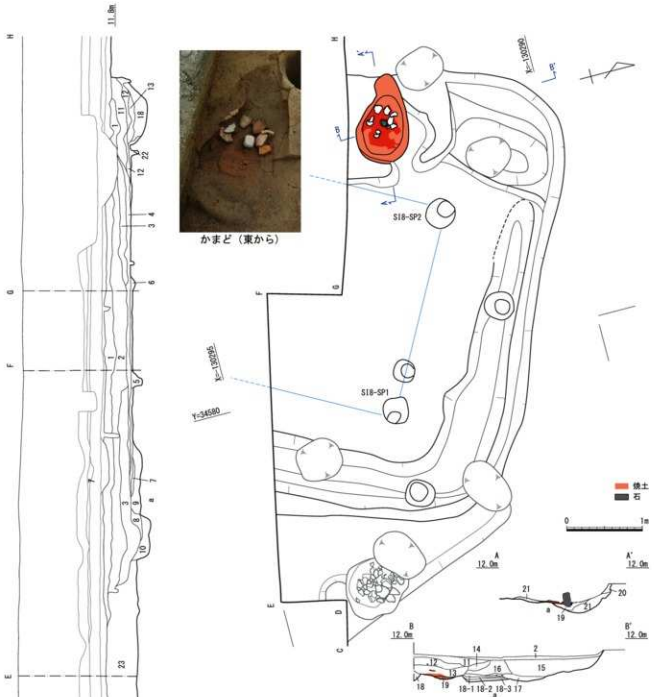


図13　SI5 (S=1:50)



7. 焼土、硬度、床土
1. S18 10YR3/2～4/2 シルト混じり細砂 炭片含む
2. S18 10YR3/2～4/2 シルト混じり細砂 炭化物含む
3. S18 10YR4/1～2.5Y4/3 シルト混じり細砂 炭含む
4. S18 10YR3/2 砂、シルト混じり細砂
炭化材多量に含む
5. S18 10YR5/2 砂、シルト混じり細砂
a層ブロック含む
6. S18 粘土 2.5Y6/3 砂混じりシルト～細砂
固く締まる
7. S18 周溝 2.5Y6/1～6/2 砂混じりシルト～細砂
8. S18 周溝 ≒7 層
9. S18 周溝 2.5Y5/1～6/2 砂混じりシルト～細砂
10. S18 周溝 2.5Y5/1 砂混じりシルト
11. S18 かまど 2.5Y5/2～6/6 砂混じりシルト
12. S18 かまど 2.5Y5/2～5/6 砂混じりシルト
焼土、炭多量に含む
13. S18 かまど 2.5Y6/2～3/2 砂混じりシルト
焼土、炭多量に含む最下部に焼土塊
14. S18 かまど 2.5Y4/1～4/2 砂、シルト混じり細砂 焼土、炭含む
15. S18 周溝上層 2.5Y4/3～5/2 砂混じりシルト～細砂
16. S18 かまど土手 2.5Y4/1～4/2 砂、シルト混じり細砂
17. S18 2.5Y4/1～4/3 砂混じりシルト
18-1. S18 かまど 2.5Y5/3～6/3 砂混じりシルト～細砂ブロック
焼土片含む
18-2. S18 かまど 2.5Y5/3～6/3 砂混じりシルト～細砂ブロック
18-1. S18 かまど 2.5Y5/3～6/3 砂混じりシルト～細砂ブロック
19. S18 かまど支柱根方 2.5Y5/3～6/3 混じりシルト～細砂
20. S18 かまど 2.5Y4/1～4/2 砂、シルト混じり細砂 焼土、炭含む
21. S18 かまど 2.5Y5/3～6/3 砂混じりシルト～細砂
22. S18 かまど 2.5Y4/1～3/1 砂混じりシルト
23. S19 10YR4/2～3/2 砂混じりシルト
24. S19 かまど土手 2.5Y5/3 シルト混じり細砂
25. S19 周溝 2.5Y5/2～5/3 砂混じりシルト～細砂
a. 基盤層 2.5Y6/3 砂混じりシルト～細砂

図14 S18 (S=1:50)

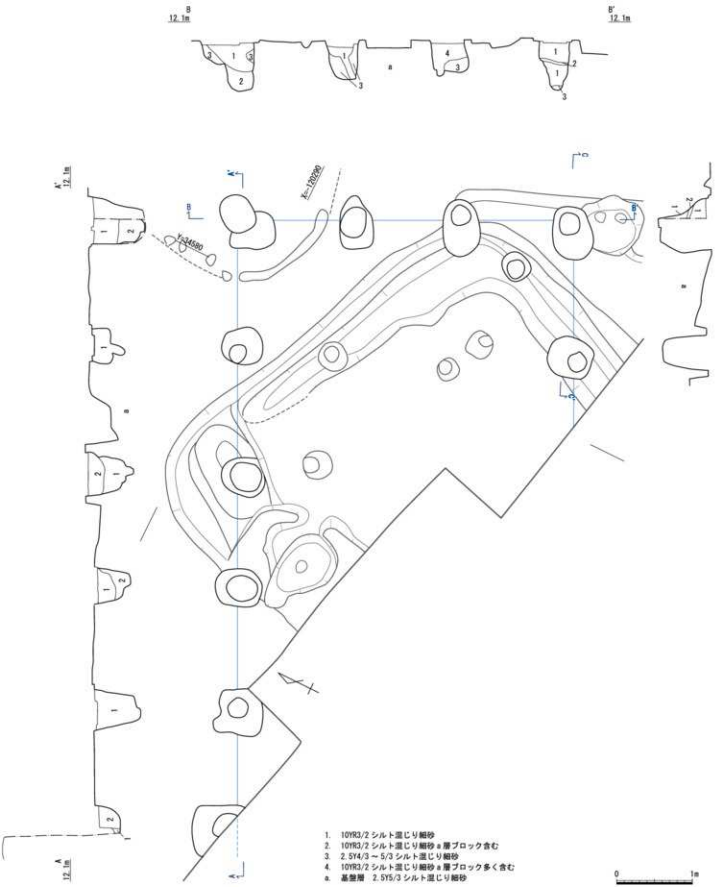

B
12.1m
B'
12.1m
A'
12.1m
A
12.1m
C
12.1m
C'
12.1m
h=12020
h=12450
1. 10YR3/2 シルト混じり細砂
2. 10YR3/2 シルト混じり細砂 a層ブロック含む
3. 2.5Y4/3～5/3 シルト混じり細砂
4. 10YR3/2 シルト混じり細砂 a層ブロック多く含む
a. 基盤層 2.5Y5/3 シルト混じり細砂
0
1m

図15 SB1 (S=1:50)

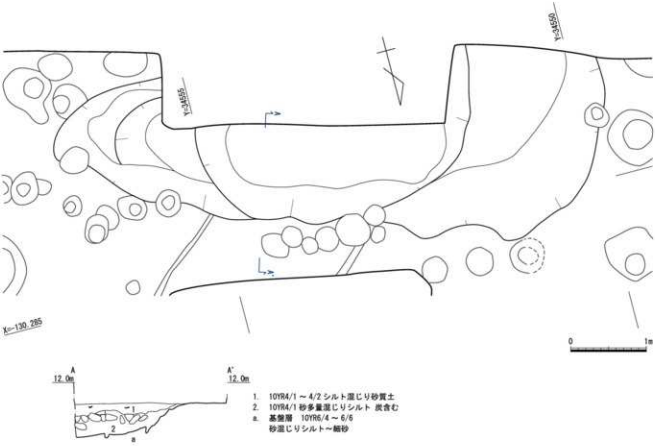


図16 SK11 (S=1:50)

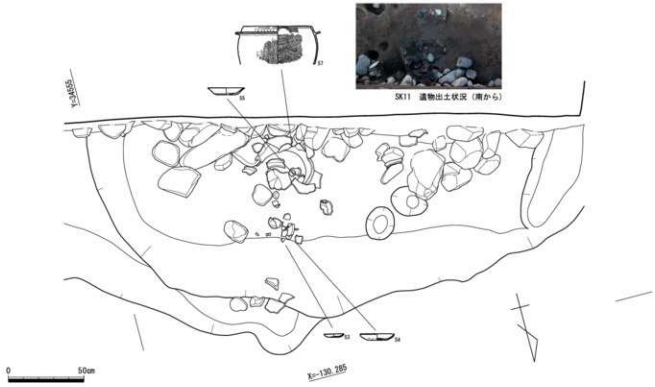


図17 SK11遺物出土状況 (S=1:25)

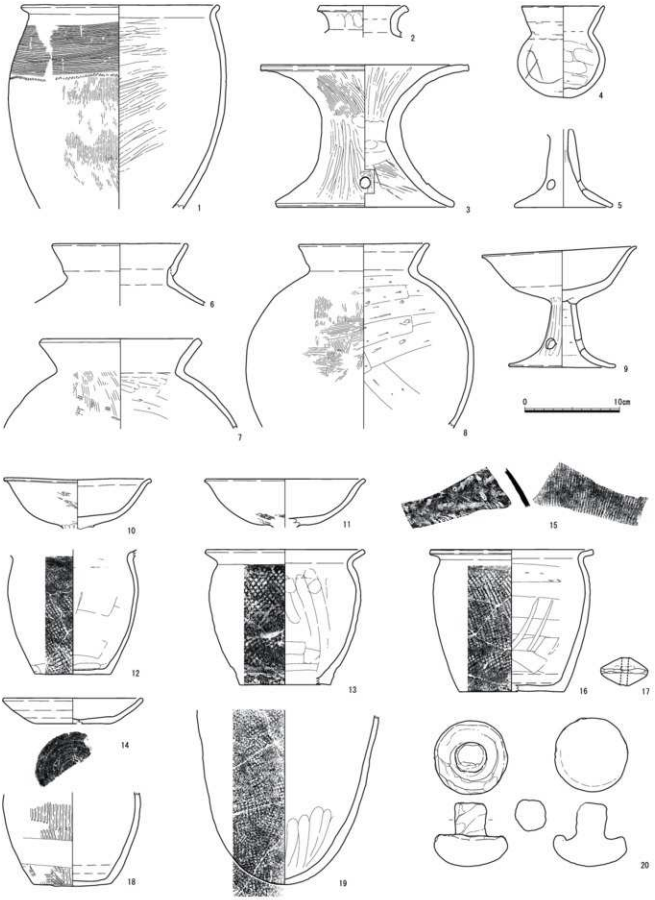


図18　出土遺物実測図1（S=1:4）

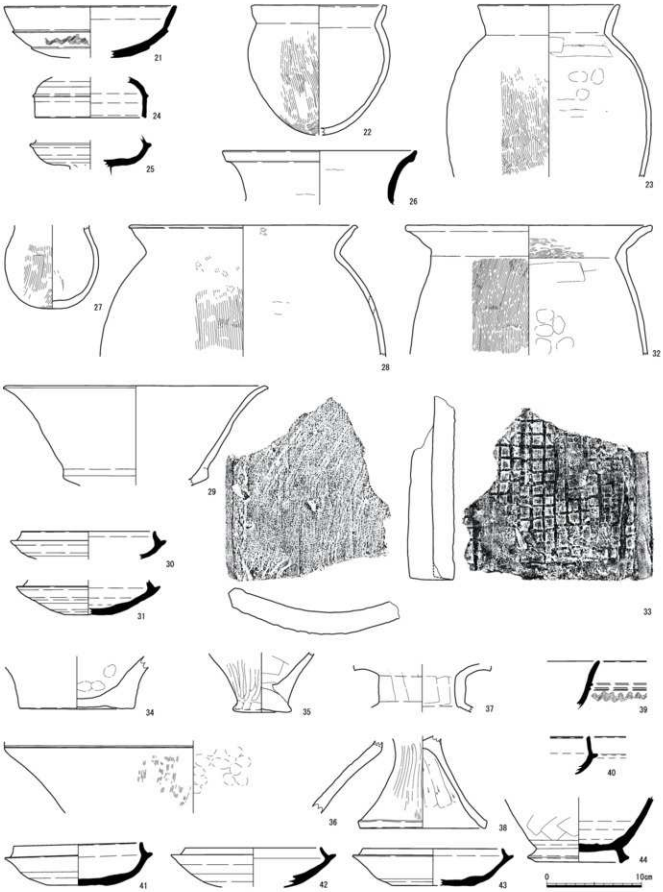


図19　出土遺物実測図2（S=1:4）

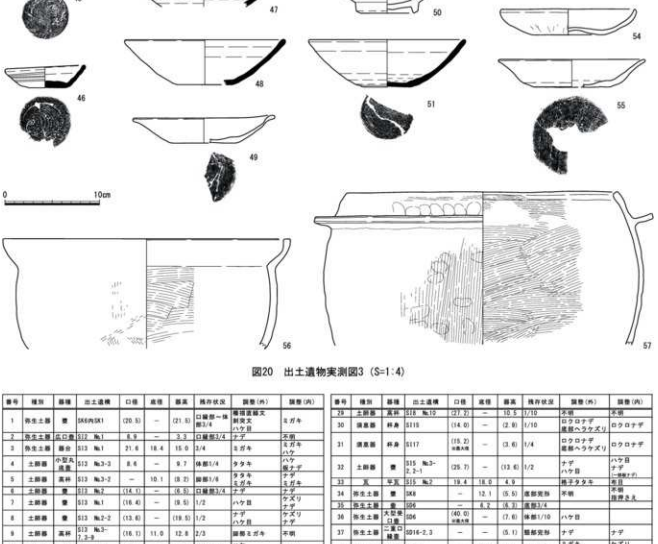


図20　出土遺物実測図3（S=1:4）

番号	種別	器種	出土遺構	口径	底径	器高	残存状況	調整(外)	調整(内)
1	弥生土器	壺	SK8内SK1	(20.5)	—	(21.5)	口縁部～胴部3/4	櫛描波線文 胴突文 ハケ目	ミガキ
2	弥生土器	広口壺	S12 No.1	8.9	—	3.3	口縁部3/4	ナデ	不明
3	弥生土器	器台	S13 No.1	21.6	18.4	15.0	3/4	ミガキ	ハケ ミガキ
4	土師器	小型丸底鉢	S12 No.3-3	8.6	—	9.7	体部1/4	タタキ	ハケ 板ナデ
5	土師器	高杯	S13 No.3-2	—	10.1	(8.2)	脚部1/6	タタキ ミガキ	ナデ ミガキ
6	土師器	壺	S13 No.2	(14.1)	—	(6.5)	口縁部3/4	ナデ	ナデ ケズリ
7	土師器	壺	S13 No.1	(16.4)	—	(9.5)	1/2	ハケ目	ケズリ ナデ
8	土師器	壺	S13 No.2-2 7.2-3-8	(13.6)	—	(19.5)	1/2	ナデ ハケ目	ケズリ ナデ
9	土師器	高杯	S13 No.3-7 7.2-3-9	(16.1)	11.0	12.8	2/3	調整ミガキ	不明
10	土師器	高杯	S118 No.3	15.3	—	(5.3)	杯部1/2	ハケ ナデ	ナデ
11	土師器	高杯	S118 No.6	16.6	(5.1)	(9.6)	杯部1/3	ハケ ナデ	ナデ
12	精式高取荒土器	平底鉢	S118 No.1	—	8.0	13.1	2/3	格子タタキ	ナデ
13	精式高取荒土器	平底鉢	S118 No.2	—	(9.7)	14.8	1/2	格子タタキ	ナデ 強調圧痕
14	土師器	高杯	S118 No.5	-14.4	8.3	2.7	2/5	ナデ ヘラ切り	ナデ
15	須恵器	壺	S19	—	—	—	体部の一部	平行タタキ ナデ	当具痕(同心円)
16	精式高取荒土器	平底鉢	S19 No.1, 2, 3	(16.8)	(11.1)	15.0	3/4	ナデ 格子タタキ	板ナデ
17	土師器	鉢蓋形	S19 No.10	5.0 底径8.0	—	2.9	完形	ナデ	—
18	精式高取荒土器	平底鉢	S111 No.2	—	8.1	(9.9)	体部以下完形	平行タタキ ナデ	ナデ
19	精式高取荒土器	長胴鉢	S111 No.5	—	—	(18.4)	体部以下完形	ナデ 格子タタキ	ナデ
20	土師器	出真	S111 No.10	7.8 底径6.0	—	6.7	完形	ナデ	—
21	須恵器	高杯	S116	(18.0)	—	(5.4)	口縁部1/20	ロクロナデ 底部ヘラケズリ 貼付文	ロクロナデ
22	土師器	壺	S116 No.1	(13.8)	—	(13.7)	3/4	ハケ目	不明
23	土師器	壺	S116 かまど No.2-6	(14.7)	—	(18.2)	1/3	ナデ ハケ目	一部板ナデ
24	須恵器	杯蓋	S18	(11.5)	—	(4.3)	底部1/6	ロクロナデ 頂部ヘラケズリ	ロクロナデ
25	須恵器	有蓋高杯	S18 No.1	(12.6) 口径8.8	—	(3.1)	1/5	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ
26	須恵器	壺	S18 かまど No.1	(20.2)	—	(5.7)	口縁部1/8	ロクロナデ	ロクロナデ
27	土師器	小型	S18 No.3	—	—	(8.8)	胴部以下完形	ハケ目	ナデ
28	土師器	甕	S18	(23.5)	—	(13.9)	1/8	ハケ目	ケズリ ナデ
29	土師器	高杯	S18 No.10	(27.7)	—	10.5	1/10	不明	不明
30	須恵器	杯身	S115	(14.0)	—	(2.9)	1/10	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ
31	須恵器	杯身	S117	(15.2) 口径14.8	—	(3.6)	1/4	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ
32	土師器	壺	S15 No.3-2, 2-1	(25.7)	—	(13.4)	1/2	ナデ ハケ目	ハケ目 ナデ (一部焼すす)
33	瓦	平瓦	S15 No.2	19.4	18.0	4.9	—	格子タタキ	布目
34	弥生土器	壺	SK8	—	12.1	(5.5)	底部完形	不明	不明 指押さえ
35	弥生土器	壺	SD6	—	8.2	(8.3)	底部3/4		
36	弥生土器	大型甕 口縁	SD6	(40.0) 口径大型	—	(7.6)	体部1/10	ハケ目	
37	弥生土器	二重口縁壺	SD16-2, 3	—	—	(5.1)	頸部完形	ナデ	ナデ
38	弥生土器	高杯	SP13	—	(12.9)	(8.7)	脚部1/4	ミガキ ナデ	ケズリ ナデ
39	須恵器	高杯	SP166	—	—	(4.6)	1/10	ロクロナデ 底切文	ロクロナデ
40	須恵器	杯身	SP263	—	—	(3.9)	1/20	ロクロナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ
41	須恵器	杯身	SK7 No.1	13.5	8.2	4.4	完形	ナデ 底部ヘラケズリ	ナデ
42	須恵器	杯身	SK17 No.1	14.4	4.3	—	1/5	ナデ 底部ヘラケズリ	ロクロナデ
43	須恵器	杯身	SD6付近 西壁断面	(14.8)	—	(3.9)	口縁部1/10	ロクロナデ 底部ヘラケズリ ナデ	ロクロナデ
44	須恵器	壺	SK3	—	10.6	(6.8)	底部9/10	ロクロナデ 底部ヘラ切り	ロクロナデ
45	須恵器	瓶	SP28-1	(7.4)	4.9	1.5	底部完形	ロクロナデ 底部糸切り	ナデ
46	須恵器	瓶	SP70	8.3	3.3	2.4	3/4	ロクロナデ 底部糸切り	ロクロナデ
47	須恵器	鉢	SP99	(16.2)	—	(4.0)	口縁部1/3	ロクロナデ	ロクロナデ
48	須恵器	鉢	SP139-2	16.8	(5.9)	(4.75)	1/5	ナデ	ナデ
49	土師器	鉢	SP139-3	(14.7)	(7.6)	(2.6)	口縁部1/5	ロクロナデ 底部ヘラ切り	ロクロナデ
50	白磁	碗	SP159	—	(6.5)	(4.7)	1/2		
51	須恵器	鉢	SK14	(16.4)	(5.6)	5.5	1/2	ロクロナデ 底部糸切り	ロクロナデ
52	瓦器	鉢	SK11 No.9	—	(5.1)	(1.0)	底部1/3	ナデ	ナデ
53	土師器	皿	SK11 No.3-1	8.2	4.6	1.5	完形	ナデ ヘラ切り	ナデ
54	土師器	皿	SK11 No.3-2	14	7.8	2.7	1/4	ナデ ヘラ切り	ナデ
55	土師器	杯	SK11 No.2	15.1	8.3	2.9	2/3	ナデ ヘラ切り	ナデ
56	土師器	鍋	SK9 No.1	(30.3)	—	(11.0)	1/20	ハケ目 ナデ	ハケ目 ナデ
57	土師器	羽釜	SK11 No.1-1	22.6	—	(4.7)	胴部1/4	ナデ	ナデ

表1　出土遺物観察表

写真 1　調査区全景（北西から）

写真 2　調査区北部全景（東から）

写真 3　1 区（南東から）

写真 4　2 区（南西から）

写真5 3～7区(南から)

写真6 8～13区(南から)

写真7 13～17区(南から)

写真8 15～19区(南から)

写真9 19～23区(南から)

写真10 調査区全景(南東から)

写真11 SI1(北から)

写真12 SI2,3(北から)

写真13 SI3遺物出土状況(西から)

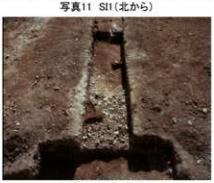


写真14 SI5(北から)

写真15 SK16(南から)

写真16 SI18(北から)

写真17 SI8,9,11・SD16(東から)

写真18 SI9(北東から)

写真19 SI11(東から)

写真20 SI8(西から)

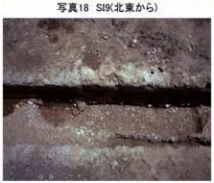


写真21 SI16(西から)

写真22 SB1(北東から)

写真23 SD16断面(北西から)

写真24 SK26(南東から)

写真25 SK11(東から)

写真26　出土遺物1 2 ※数字は遺物実測図番号に対応する

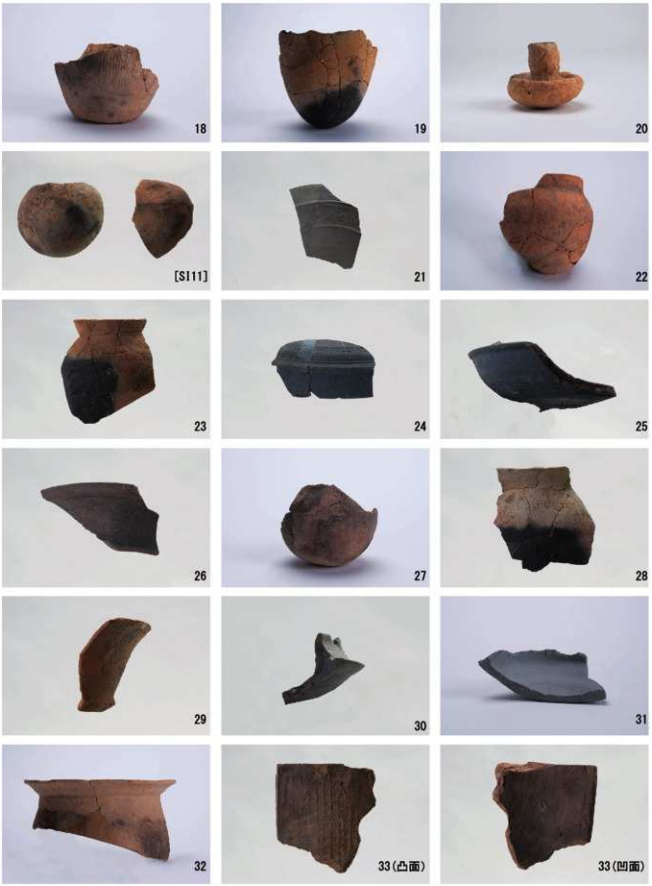


写真27　出土遺物2 ※数字は遺物実測図番号に対応する

写真27　出土遺物3 ※数字は遺物実測図番号に対応する

報告書抄録

ふりがな	いちのごういせきだい16じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	市之郷遺跡第 16 次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第59集
編著者名	小柴 治子
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地 1　　TEL.(079)252-3950
発行年月日	平成 30 年(2018 年)3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちのごういせき 市之郷遺跡	兵庫県姫路市 日出町三丁目 19-1	28201	020462	34° 49′ 30″	134° 42′ 39″	2016. 12. 20 ～ 2017. 5. 10	1,191.7 ㎡	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
市之郷遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物跡、溝	弥生土器、石器	20160402
		古墳時代	竪穴建物跡、柱穴、 掘立柱建物跡、土坑、溝	須恵器、土師器	
		奈良時代	土坑	土師器、平瓦	
		中　世	土坑、柱穴	須恵器、土師器、陶磁器	

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第 59 集

市之郷遺跡第 16 次発掘調査報告書

編　　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地 1
発　　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目 1 番地
発 行 日　平成 30 年 (2018 年) 3 月 31 日
印刷・製本　内海印刷株式会社
〒670-0808　兵庫県姫路市白国 5-8-4